

5. 哺乳類

5-1 食虫類（トガリネズミ類）

近藤(1988・文献60)が既存の文献から、知床の食虫類についてまとめている。

知床では下記の4種の食虫類が生息する。道内でこれ以外の食虫類は、芦別以南で記録されているジネズミのみである。

* オオアシトガリネズミ

極東に分布する種で、我が国では北海道とその属島に生息する。4種の中では常に最優占種として報告される。

* エゾトガリネズミ

我が国には北海道本島のみに生息する。4種の中ではオオアシトガリネズミに次いで大きい。広域に分布する。

* カラフトヒメトガリネズミ

分布は道央以北の湿原、高山帯、道東や道北の北方系植物群落に限られる。捕獲数は多くない。

* トウキョウトガリネズミ

世界で最も小さい部類に属する哺乳類。4種の中で最も分布が局所的で生息数も少ない。

知床横断道路を中心として、179-83年に調査がおこなわれた。

いずれの調査でもオオアシトガリネズミが最も多く捕獲された。また同種は、すべての調査区で捕獲され、広い範囲の環境に生息した。

カラフトヒメトガリネズミとエゾトガリネズミは全体的には10%前後の捕獲数であった。カラフトヒメトガリネズミは半島部の海岸地域や知床峠近くなどで多く捕獲されている。他地域での結果と併せて考えると、地表面のクッションが発達した環境（針広混交林や高層湿原）を選択している可能性があり、生息環境の選択が特殊化している。全道的には希少種であるが、知床ではかなりの生息数があると思われる。

エゾトガリネズミは多くの環境で捕獲されている。乾燥した、腐植層の発達の悪い森林に多い傾向が示唆されている。

トウキョウトガリネズミは半島基部の伊茶仁川で一例あるのみである。

トガリネズミ類の生息環境は、環境条件として土壌層が大切である。それも種によって選好する土壌層の条件が異なる。中でもカラフトヒメトガリネズミは生息環境が特殊化しており、北海道内でも分布が局限されているが、知床半島では同種の生息環境が高山から海岸まで残っている。そのため、カラフトヒメトガリネズミの生息数は道内他地域に比較すると豊かである。これらのトガリネズミ類の保護には、上層木の伐採などにより、土壌条件を改変しないこと、高層湿原など一度破壊されると回復の困難な植生の保護に十分考慮する必要がある。

5-2 齧歯類（ネズミ類）

近藤（1988・文献60）が1979-83の現地調査を中心に、知床のネズミ類についてまとめている。

知床では3属6種のネズミ類が記録されている。

エゾアカネズミ
カラフトアカネズミ
ヒメネズミ
エゾヤチネズミ
ミカドネズミ
ドブネズミ

植生（森林帯）とそこに生息するネズミ類の関係は以下のものであった。

ハイマツ帯ではヒメネズミ、エゾヤチネズミ、ミカドネズミの3種類が捕獲された。しかしいずれも多くない。これはハイマツの純林のため、林床植生がほとんどないという、単純な生息環境のためである。

針葉樹林帯（針過混交林）では、ヒメネズミ、ミカドネズミが優勢であった。特にヒメネズミが多い。

広葉樹林帯（広過混交林）では、エゾアカネズミとエゾヤチネズミが優勢であった。広葉樹林帯でも、比較的トドマツとエゾマツの混じった地域で、林床が一部地衣類に覆われた調査地ではミカドネズミの多い例がある。

灌木林帯（低山帯の矮性化した灌木林、伐採跡地）ではエゾアカネズミ、ヒメネズミ、エゾヤチネズミの3種類が捕獲された。このような場所はごく狭い範囲に限られているため、実際にはそこで繁殖していない可能性、他からの分散個体である可能性が高い。

草原帯（牧草地をのぞく荒廃草原および海岸自然草原）ではドブネズミをのぞく5種すべて捕獲された。草原帯は海岸に沿ってのごく狭い範囲数かなく、隣接する森林帯からの分散個体群の影響を受けているものと思われる。エゾアカネズミ、ヒメネズミが多く捕獲される例があったが、一時的生息地と見るべきである。この植生でエゾヤチネズミが優占したのは、全道的な傾向と合致する。

家ネズミは北海道に3種生息するが、通常は人家付近または人家内で捕獲され、原生環境内で捕獲されることはない。ドブネズミの場合は、道路建設後に、山岳地帯へ進入する例が見られる。知床においては、横断道路建設中の1979・80年の調査では捕獲されなかったが、道路完成後2年たった1982年に横断道路沿いで捕獲された。

知床に生息するネズミ類は、特殊な分布をするカラフトアカネズミとドブネズミをのぞくと二つのグループに分けられる。

エゾアカネズミ・エゾヤチネズミのグループは、広葉樹が増し、かつ下草が繁茂するに従って優勢となる。ヒメネズミ・ミカドネズミのグループは、針葉樹が増し、下草が疎らな方が優勢する。二つのグループのバランスは、原生状態においては保たれていると考えられる。植生の変化は、これらのグループのバランスに影響を及ぼす。伐採等により上木をのぞくことで、林床植生とともに種の構成が変わる。また、種子を生産する樹木（特にミズナラ）の伐採は、エゾアカネズミ、エゾヤチネズミという、種子を大量に消費する種の冬期間の生存に影響する。

5-3 ヒグマ

知床半島のヒグマについては、北大ヒグマ研究グループを中心に、盛んな調査がおこなわれている。山中他（1988・文献60）は、既存文献および現地調査から、知床のヒグマについてまとめている。

この中で山中らは、知床の4ヶ所で調査をおこないそれぞれの場所の特徴を次のように記している。

① 知床岬周辺

2平方kmの海食台地上には大型草本・ササ群落があり、この自然草原は知床半島の中で最も広いものである。ヒグマの夏期の主要な餌である、セリ科草本、オオブキが豊富である。

② ルシャ川周辺

ルシャ川の流域面積は半島中央部以先では最大であり、針広混交林が広がっている。この地域より先では、稜線から低地まで高山・亜高山帯の植生が広い面積を占め、針広混交林は狭い帯状に分布するのみである。よって、ルシャ川流域の針広混交林は、半島中央以先唯一の大きな広がりを持っている。ただし、1950-60年代に伐採がおこなわれたため、林相は比較的貧弱である。

秋期にはカラフトマス・シロザケの遡上が見られ、遡上数は岩尾別川以先の河川の中で際だって多い。ルシャ川には河口に捕獲場があるため、遡上魚類のほとんどはそこで捕獲されるが、テッパンベツ川、ポンベツ川では河口部での捕獲がほとんどないため自然産卵がおこなわれている。

③ 幌別・岩尾別地区

海岸には高さ100-200mの海食崖が発達し、その上に約1kmの幅の台地状地形が広がっている。台地上はほとんどが開拓跡地で、草原か二次林になっている。

3本の河川のうち岩尾別川にはサケマス類の遡上が多いがほとんど河口で捕獲される。他の2本の河川では自然産卵が見られるが遡上数は少ない。

④ 遠音別岳地区

春荊古丹川と遠音別川の流域では、標高500m以上はハイマツ帯が広い面積を占めている。それ以下は針広混交林が広がるが伐採が進み、林相は貧弱で人工造林地も多い。

両河川ともサケマスの上流への遡上はほとんどない。

食 性

以下は、山中らによる上記4地域のフン分析の結果である。

草本類と果実類がヒグマの主要な食物である。特に草本類は重要である。分類学上食肉目に属するヒグマは、植物食に適した消化器官を持たないため、植物質の消化率は低い。そのため、それぞれの植物の栄養価の高い時期に多量に食べることで消化率の低さを補っていると考えられる。

植物への依存度は高いが、動物質が利用可能であれば、集中的に利用する。国外では、地域によってはサケ科魚類が積極的に捕食され、季節的に重要な食物になる例がある。北海道でも過去においてはサケ科魚類は秋期のヒグマの重要な食物であったと考えられる。現在では知床など一部を除いては利用されていない。サケマスの自然産卵河川を持つ知床は、ヒグマ本来の食性を回復させることができる地域である。

1) 植物質

草本類

は春期と夏期の最も重要な食物である。オオブキは最も頻繁かつ多量にフンから出現し、5月から、10-11月に利用される。7-8月には約50%の出現頻度となりきわめて重要な食物となっている。

セリ科草本は、オオブキに次いで重要な食物である。オオハナウド、エゾノヨロイグサ、オオカサモチ、マルバトウキの4種が主に利用される。季節的な利用はオオブキとほぼ同様なパターンが見られるが、やや早くから利用されはじめ、4-6月には草本類のうちで最もよく利用されている。

イネ科・カヤツリグサ科の草本は、4-8月には量的にはわずかであるが、9月には草本類のうちでは最多となる。

エゾイラクサは主に春のフンから出現し、5月には最も多く利用される食物である。

果実類は秋の最も重要な食物である。果実類は夏期から利用されはじめ、9月にはいると出現頻度・容量比とも草本類を上回るようになる。10-11月には、フン内容物の大部分を占めるようになる。

ミズナラの堅果（ドングリ）は、通年の出現頻度・容量比で、オオブキと同程度の比重を占める重要な食物である。採食は9月から10月にかけて急増し、10、11月には容量比60%以上となり、11月には出現頻度90%を越える。さらに、春期の補助的な食物としての役割も持つため、ヒグマにとってきわめて重要な食物といえる。

サルナシとウドの多肉果も9-10月に比較的多く出現した。サルナシは10月に、ウドは11月に、それぞれミズナラに次いで重要な食物であった。ハイマツとミヤママタタビは9月に、ヤマブドウは8-11月に利用される。

2) 動物質

海産の無脊椎動物は春期に2例（貝類、ハナサキガニ）出現したのみで他の季節には見られなかった。

魚類では、カラフトマス3例、オショロコマ1例が出現した。カラフトマスは10月のフンで見られ、出現頻度は低い、3例のうち2例はほぼ全量がカラフトマスで占められていた。

鳥類は4月に容量比が高かった。しかしこれは標本数が少ないため、全体に出現はまれで量的にもわずかである。

哺乳類は春期と秋期に出現し、エゾシカ・エゾユキウサギが同定できた。エゾユキウサギは少量出現したのみであったが、エゾシカは5月と10月に見られ、頻度は低い、容量比の高いものがあった。

海岸に打ち上げられたトドの死体を採食した痕跡があった。

動物質のうち最も頻繁に利用されるのは昆虫である。しかし量的には少ない。

北米や沿海州など、サケ科魚類が豊富な地域では、これら魚類が季節的に重要な食物になっている。知床半島でもサケ科魚類の河口付近までの遡上は多いが、自然産卵河川に限られているため、現状では食物としての比重は小さい。

3) 食性の地域差

知床全体ではオオブキが夏の最も重要な食物であるが、ルシャ川周辺と知床岬では、セリ科草本の重要度の方が高い。ルシャ川周辺ではキノコ類の利用が多い。

秋期のサケ科魚類の利用は、ルシャ川周辺、幌別・岩尾別地区のみで見られた。

環境利用

山中らにより、知床半島の2地域でのヒグマの環境利用の調査がおこなわれた。その結果から示された、ヒグマの環境利用の年周期は以下の通りである。

北海道のほとんどの地域で、人間の活動によりヒグマは平野部や海岸部から駆逐されている。知床半島は、海岸から高山まで連続的にヒグマの利用可能な環境が残された唯一の地域である。

ヒグマは、季節的に変化する食物資源の存在に柔軟に対応して生活している。

ヒグマの利用環境は、春期から秋期に向かって、利用する食物の豊富さに応じて、海岸から沢筋・山腹・高山帯へと垂直的、水平的に多様性を増してゆく傾向が見られる。初秋には一年で最も多様な環境が利用されている。

ルシャ地域での調査

村上（1994・文献46）はルシャ・テッパンベツ川河口でヒグマの食性、カラフトマスの遡上による採食地利用の変化をテーマとした調査をおこなった。以下はその要約である。

1) 食性

7月下旬に確認された食痕は、マルバトウキ、エゾオグルマ、アキタブキ（オオブキ）、アリであった。ルシャ川では河口部で、テッパンベツ川では河口より1 km以上上流で記録された。

10月にはカラフトマスを採食した食痕がルシャ川で1例、テッパンベツ川で3例記録されたほか、テッパンベツ川でカラフトマスの採食を直接観察した。フンからはカラフトマスのほか、ミズナラ堅果、サルナシが出現した。

これらから、ヒグマは10月にはカラフトマス採食を目的のひとつとしてルシャ・テッパンベツ川流域を利用しているとしている。しかし同時に、ミズナラ、サルナシの果実も利用していると指摘している。

この調査では、目撃記録、フン、足跡、爪痕等の記録もおこなっている。それらの記録は本調査地全域（河口より約2～2.5キロ上流まで）で発見されており、両河川の流域の低山帯をヒグマが利用していることが明らかである。

保護の課題

山中らは、ヒグマの保護管理の課題として下記の点を指摘した。

1) 生息環境の保全

特に秋の採食地の環境を保全し、餌資源の多様性を保つ必要がある。ヒグマの秋期の主要な食物である果実類は、年による豊凶の変動が激しいため、ヒグマは多種の餌を利用することによって食物供給の安定をはかっているからである。

秋期の主要な採食地である針広混交林では、重要な食物源であるミズナラなどの供給量を低下させないような配慮が必要である。

ルシャ川周辺の混交林は、過去の伐採によって荒廃している。この回復をはかることは、この地域のヒグマ個体群の維持のため必要である。

サケマスをヒグマが利用できるような環境を回復することも重要である。サケマスが遡上でき、ヒグマが利用できる河川は知床でも数少ない。しかも、そこでもしばしば人間の立ち入りにより妨害を受けている。

サケの遡上・自然産卵できる河川を増やすことは、現在の人工増殖事業と共存できると考えられる。自然産卵の増加は、サケマス資源の多様性を確保する点でも有意義である。また、シマフクロウなど他の動物の保護にも資するものである。

2) 被害と駆除

ヒグマによる被害は、①ヒグマ生息域に立ち入った人間に、恐怖感や障害を与える、②人間の居住域に出没して恐怖感や損害を与える、③農作物や家畜への被害、に分類した。

①のうち直接的な人身被害は全道的に減少しており、近年知床でのハンター以外の人身事故は、岩尾別孵化場職員が軽傷を負った例があるだけである（1986）。②の被害は、知床では羅臼で人家に侵入した事件があったが（1986）、番屋への接近や侵入の例も少なくない。③の被害は、斜里町ではニンジンやビートの被害があり、年間平均43.2件、被害額500万円程度である（1988年以前）。

ルシャ地域の場合

ルシャ地域での場合を考えると、①②の可能性はある。①の要因として、山中らはヒグマ出没地域への不注意な立ち入り、住民・観光客に対する情報提供や指導の不足を挙げている。ルシャ地域は、林道のゲート管理により、一般観光客が立ち入ることはあまりないと考えられるが、現地調査時にも、取材や写真撮影のための立ち入りが多く見られた。前記のように、ルシャ地域はヒグマの重要な採食場所であり、その行動を妨害しない意味からも、不必要な立ち入りはなるべく押さえるべきと考えられる。

②の例が発生するのは、ほとんど例外なく秋であり、果実の凶作年に多いことがいわれる。食物の不足から、通常の生活域を離れ人間の生活圏に食物を求めるのが原因である可能性が高い。ルシャ地域の場合、漁業番屋とサケマス孵化場施設があるのみである。ヒグマを誘引するのは直接的には生ゴミや水産廃棄物などの屋外の放置であるから、それらの管理を厳重にすることである程度被害を防ぐことができると考えられる。

北海道のヒグマにとって、生息地の破壊と並んで減少の大きな原因となっているのが、狩猟や有害駆除による捕獲である。ルシャの場合、国立公園内であり、狩猟の影響はないが、人間への被害が起これば駆除が実施される可能性がある。人間側の適切な対応によって、被害を防止することは、ヒグマの保護にとって重要といえる。

5-4 エゾシカ

知床のエゾシカについては、梶、大泰司らの調査があり、それら既存の研究を梶（1988・文献60）がまとめている。以下に抜粋する。

（その後、個体群動態や生息地利用の研究が行われているが未発表）

1) 知床への再分布

知床のエゾシカは、1879年、1903年の大雪等で絶滅したと考えられる。全道的には禁猟などによって個体数の回復が起こり、1950-60年代に分布域を回復し70年代には北海道東部をほぼ埋め尽くした。知床でも、1960年代以降にまず羅臼側に定着し70年代に斜里側に広がった。

2) 生息地利用、食性の季節的变化

エゾシカの分布はダケカンバ帯以下であることが多いが、知床ではおよそ標高600mでダケカンバ帯に移行するため、他地域より低標高に分布が限定される。春と秋には平野部・海岸部で多く目撃される。早春には、融雪がいち早く進む海岸付近で採食する。

越冬地は、泊まり場となるトドマツ林、採食場となる広葉樹林と海岸草原上のササ原がセットになった場所である。

夏期の食性では、草本類・木本類の多様なメニューが見られるが、草本類が多い。初冬の30cm以下の積雪下では、エゾイタヤ、イヌツゲ、枯れたオオブキなどが採食された。厳冬期から晩冬にかけては、ササと木本が主要な餌となる。

ササはシカの冬期の餌として重要である。樹皮の採食（剥皮）は餌の不足する冬に起こる。はじめ、小径木の剥皮が見られ、生息密度が増加すると大径木の剥皮が起こる。

3) 生息密度・個体群動態

秋のセンサスでは、斜里側では1980年以降著しい増加を示している。知床岬の春のセンサスでも、86年以降急増している。

エゾシカは2歳から出産し、妊娠率は非常に高い。そのため潜在的に非常に高い繁殖能力を持つ。知床での1978-87のメス100頭あたりの子供の数は、平均50であった。これはエゾシカの増加期に見られる高い生産力を示している。

豪雪によりシカの大量死が起こることが知られている。知床岬では近年大雪や、餌不足による大量死は起こっていない。

4) 保護管理

国立公園を保護管理のひとつの単位としてみた場合、知床岬以外は地形が厳しく積雪も多いため、永続的にシカを維持できるか疑問とされる。知床半島部では越冬適地が少ないため、越冬地での森林伐採はできるだけさけることが必要である。

ルシャ地域の位置づけ

ルシャ川地域では、現地調査によって、海岸－河口平坦部で秋に比較的高密度に生息することが確認された。また、同時期、繁殖行動に利用されていることも確認された。

梶等の調査からも明らかなように、無積雪期には混交林内の草本類・木本類を幅広く採食する。また冬期には、流域の針広混交林は泊まり場として利用され、海岸平坦部は冬期の重要な餌となるササの採食地として利用されている。海岸部の草地は、餌の少ない春の雪解け時期、真っ先に雪が解けるため貴重な餌場となる。このように季節によりエゾシカは海岸部から針広混交林までを生活資源として広く利用している。

急峻な傾斜地が大部分を占める知床の半島部では、ルシャ地域は流域の傾斜が比較的緩やかで、海岸平坦部も広い面積を持つ（ウトロ側では、知床岬に次いで広い）。このため、エゾシカの生息地としては、通年を通して利用可能な地域であり、良好な生息地である。半島部でのエゾシカ個体群の維持の上で重要な地域と考えられる。

このことから、ルシャ地域においては、海岸・河口部から流域全体をエゾシカの生息地として保全する必要がある。

5-5 その他の哺乳類

翼手目

前田ら（前田他 1991・文献 61、前田他 1993・文献 58、中川 1991・文献 25）の調査がおこなわれている。その結果、知床半島全域で 10 種の翼手目が記録されている。半島基部の斜里町の海岸林では 7 種のコウモリが記録されていて、これは、樹洞性コウモリ類の一地域での記録数としては全国的にも非常に多いものである。記録されたコウモリ類の大半は樹洞性（森林性）であり、大径木の樹洞に棲息する種である。その点で、森林の保護と密接な関係があるが、知床半島部での生息状況については詳細は不明である。

ルシャ地域においても、生息が予測されるが調査が実施されたことはない。

リス類

リス類を目的とした調査はおこなわれていない。近藤（1988・文献 60）が過去の記録をまとめている。それによると、シマリスは海岸草原・広葉樹林・針葉樹林・ハイマツ帯と様々な環境で捕獲されている。知床林道での目撃例も多く、知床五湖、知床林道駐車場で人の手から餌をとる姿を目撃することもよくある。このことから、エゾシマリスは知床全域においてポピュラーな種であると結論づけている。

今回の現地調査では記録することができなかったが、上記の点から、ルシャ地域でも普通に生息するものと考えられる。

エゾリスについては、近藤は、半島基部での死体拾得・目撃例ほか、知床五湖、岩尾別、知床林道での目撃例を記している。エゾシマリスに比較すると確認例は少なく、確認場所は山岳地帯下部に限定されている。これは、エゾリスが樹上性であり、オニグルミ、ミズナラ、トドマツなどの種子を利用するため低山帯に分布が集中するとしている。

現地調査では、11月8日、ポンベツ川南側の林道上で 1 個体を目撃した。場所は、海岸平坦部と斜面の混交林との境界である。上記のように、ルシャ地域においても、エゾリスは流域の森林帯に生息するものと考えられる。

エゾリスは森林に依存して生活する種であり、森林の保護はこの種の保護のために重要である。